

今年度は、小学校9名、中学校3名の、合わせて12名の学校長が60才の節目を迎えられます。これまで長きにわたり、本市の教育にご尽力いただいたことに、心から感謝します。

今年から、定年延長になり、引き続き学校現場に残られる方や、退職され新たな人生を歩まれる方もおられることと思います。

校長として残された1か月余りの期間に、本市の教員として、また、管理職として先頭になり取り組まれてきたことを、学校の教職員や後進の校長先生方にしっかりと伝えてください。

## 1. 奈良市教員意識調査アンケート

本市では、「奈良市教育振興基本計画」で設定している指標の現状確認と、教育行政のあり方を考える基礎資料とするため、「奈良市教員意識調査アンケート」を実施しています。2月13日時点の速報値としてお伝えします。

「教員という職業について」の項目では、「やりがいがある」「教員であることに誇りを持っている」の「肯定的な回答」が8割以上と高い一方、「若い人に薦めたいか」という質問では、「肯定的な回答」が43%と、低い結果になりました。

「年代別」に見ると、「やりがい」について、30才から40才未満のミドルリーダー世代の「肯定的な回答」が、若干低くなりました。この年代は、責任あるポジションや、異動等環境の変化がある時期と考えられます。学校長には、ミドルリーダー世代や学校の実態、校種の違いに目を向け、意識的な声掛け等、丁寧な対応をお願いします。

「職かい別」では、「やりがい」について、教諭で「肯定的な回答」の割合が少し下がり、教頭では、「非常にやりがいがある」と回答した割合が下がる傾向が分かりました。市としても、「職かい」の現状を捉え、手立てを講じていかなければなりません。

このように、データをかけ合わせたりすることで、見えてくることもあるため、これまでの、校長先生方の「経験と勘」に加えて、教職員の実態を把握する中で、このようなデータも活用してください。

次の、「業務について」の項目では、「①時間的・精神的な辛さはそれほどなく、やりがいを感じる(21%)」、「②時間的・精神的な辛さはそれほどないが、やりがいも感じない(6%)」、「③やりがいを感じるが、時間的・精神的に辛い(66%)」、「④やりがいを感じず、時間的・精神的にも辛い(7%)」でした。

「やりがいは感じつつも、「時間的・精神的に辛い」と感じている割合が高いことが分かります。3年間の経年でも、7割が「時間的・精神的に辛い」と回答していて、改善が進んでいないこととなります。

これは、「働き方改革」と深く関わる項目でもあり、教職員の「ワークライフバランス」を考慮し、「ライフキャリアの意識」を高め、改善を進めていく必要があります。

さらに、「自由記述」の内容を分析したところ、「楽しさ」「やりがい」を感じる場面として、「子どもの成長に立ち会える」「子どもと関わっているとき」が最も多く、「同僚の先生や保護者、地域の方に認められたとき」「自分自身の成長を感じるこゝがきたとき」などでも、やりがいを感じていることが分かりました。一方、「悩み」や「辛さ」を感じる場面としては、「業務が多い」「職員室での人間関係」「時間が足りない」や「複雑化・多様化する生徒指導や保護者対応」などがあがっていました。

この結果も踏まえながら、次年度は「学校教育の充実」「多様な学びの支援」「子育て環境の充実」を三本の柱に、「AIドリルの使用学年の拡大」「通級指導教室の拡大」「フリースクールの充

実」などを通して、個別最適化、自立学習ができる環境づくり、支援員の充実等、多様な子どもたちが多様に学べる環境を整え、「教育のDX化」を推し進めます。

アンケート調査の最終的な結果は各学校に報告しますので、学校長は、各校の実態と併せて分析し、教職員への声掛けやポジティブな学校運営体制の構築と学校経営に活用してください。

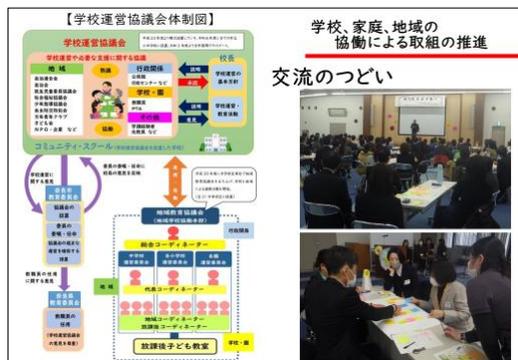
## 2. 地域学校協働活動について

「奈良市教育振興基本計画」の基本方針の一つに、「学校、家庭、地域の協働による取組の推進」を掲げています。令和元年度には、全ての小中学校にコミュニティ・スクール（学校運営協議会）を設置し、地域と学校が一体となって、子どもたちの教育活動の充実を図っています。

いま、直面している課題は、学校運営協議会が形骸化していないか、ということです。単なる報告や情報共有で終わっては、せっかくの組織が機能していないことになります。学校の子どもたちに必要なことを議論できる学校運営協議会となるよう、次年度に向けて準備をお願いします。

先月、22日、市役所の正庁において、「第10回交流の集い」を開催しました。私も参加し、学校と地域の繋がりや強さと、協働・連携における学校長の役割の大切さを改めて知ることができました。

この後、竹原特任指導主事から、これまでの取組を振り返り、地域と学校が連携・協働する学校経営に必要なことについて、自身の経験を踏まえて話をさせていただきます。



## 3. 学校を取り巻く状況について

先日、「中核市教育長会」において、文部科学省財務課安井課長が次の話をされました。

- ・「学校を取り巻く状況が、これまでの教師と児童生徒が時間と場所を共有した教育活動を前提としたものから、教師と生徒が対面することを要しない学習形態へ変わっていく。」
- ・「一人一台端末を通じた多様なデジタル教材で、いつでも、どこでも、学びたいときに学びたいことが学べる時代になる。」

このような状況では、改めて「教員と学校の存在意義」が問われることになります。1月の校長会でも話した「学校で学ぶこと」「教師とともに学ぶこと」に「価値付け」しなければ、学校に子どもが集まらなくても学べる未来がそこまで来ています。

学校で学ぶことの意義や価値について、学校全体で議論し、来年度の組織体制の構築に努めてください。

最後に、来年度も学校の舵を握っていただく校長先生方につきましては、大きく変化していく時代の中で、子どもたちの学びを止めることなく、引き続き、誰一人取り残さない「ウェルビーイング」な取組をお願いします。

今年度の定例の校長会は、今回が最後になります。改めて、一年間のお礼を申し上げます。皆さん、一年間ありがとうございました。